

夏目漱石と日本の近代

—百年後の今日に語りかけられていること—

柴田 庄一

はじめに

本日は、夏目漱石（1867-1916）と日本の近代を主題に、入門的なお話をしてみたいと思います。皆さんがたには、まだあまり馴染みがないかも知れませんが、夏目漱石は、『吾輩は猫である』や『坊っちゃん』、『それから』や『こころ』といった人気小説の作者として広く知られており、今日においても「国語」（日本語）の教科書などに取り上げられて、日本ではもっとも高名な作家の一人です。

夏目漱石は、19世紀のちょうど世紀末に当たる、1900年（明治33年）の9月、フランスのパリ万国博が開かれた年に英国留学の途に上り、2年間にわたる欧州滞在を経験していますから、当時としては、いわばトップクラスの英文学者になることを期待されていたわけです。

彼が東京に生まれたのは、明治維新（1868年）の前の年、すなわち江戸時代の最後の年に当たる慶応3年（1867年）のことですが、この世代の人たちにはまだ数多く見られたように、幼い頃から親しんだ漢文学に優れた素養と、知識や教養がありました。

ところが、長じて後、英文学を学んでみると、漢文学と英文学とでは、同じ「文学」とはいつても、それぞれお互いがあまりにも違っているわけです。そうすると、「文学」とは、いったい何なのか。また、自分が目指そうとしている「文学」とは、そもそもどういふものなのか。そういう根本的な疑問に取り付かれてしまうわけですね、

こうして、漱石は、イギリス留学の間も、一最後の一年間は特にそうなのですが、後に『文学論』（明治40年）という一冊の書物にまとめられることになる、原理的な問題を実に真剣に考えるようになります。

このように、夏目漱石という作家は、何事に対しても、単に時代の波に乗って、要領よくスマートに生きていくというようなことができなかつた人です。それゆえに、彼は、当時の日本全体を覆っていた「近代化」の嵐、一それは、先進国である欧米をモデルにして、なんでもかでも模倣して取り入れていけばよいのだとする、明治時代に特有の風潮のことをいいますが、—、そういう「近代化」（「開化」）の波に対しても、手放しでこれを謳歌することができませんでした。

後で、もう少し立ち入って検討してみたいと思いますが、漱石は、日本の近代化を「皮相上滑りの開化」（「現代日本の開化」）であると痛罵（手厳しく批判）しています。すなわ

ち、「日本の開化」は外からの圧力に押されて止むを得ず進めているというだけで、あまりにも外発的、表面的で「なっちゃいない」（「これではダメだ」と苦々しく思っていたわけですね。そのことは、また、彼の文学活動そのものにもはっきり表われていると考えることができます。

つまり、夏目漱石は、留学を終えて帰国してからも、東京大学の講師や第一高等学校の教授になって、研究者としての生活を続けたわけですが、三十歳台の終わりごろになって、本来の念願であった小説創作を中心とした文筆活動に入っていきます。そして、最終的には、朝日新聞の文芸記者に迎えられ、ほとんど一年に一作といったインターバルで、力のこもった長編小説を書き継いでいくという、まことに精力的な創作活動に勤しむことになるのです。

旺盛な創作意欲の噴出—多彩な初期作品

ところで、夏目漱石は、一般的には、日本における近代文学の大成者であると見なされていますし、また、そうした位置づけが、あながち間違っているわけでもありません。しかしながら、そう簡単に一言で済ませてしまうわけにはいかない、もっと複雑な面をもっていました。とりわけ、40歳でプロの小説家になるまでの初期作品は、その題材も文体も、実に多種多様でバラエティに富んだものでした。

たとえば、最初の長編小説であった『吾輩は猫である』（明治38年）は、そのタイトルからも予想される通り、捨て猫を、物語の語り手として設定し、猫の飼い主で、英語教師でもある「苦沙弥先生」を中心とした人間社会を、辛辣に、あるいはまた、ユーモラスに諷刺するという斬新なものですし、もっとも人気の高い『坊っちゃん』（明治39年）と『草枕』（明治39年）という小説も、共通項はといえば、どちらも短編であるという点くらいで、その構想もストーリーの展開も、ほとんど同じ作者の手になるものとは到底思えないほど、別個の個性を具えた作品です。

また、漱石一流の詩的想像力を、思う存分に羽ばたかせた作品集に『漾虚集』（明治39年）と題する一冊があります。

これは、留学当時のロンドンを舞台とした短編と、『アーサー王物語』という、イギリス中世の騎士伝説に取材して、独自の作品世界を紡ぎ出した小説との、全部で七つの作品で構成されていますが、文字通り「虚に漾う」幻想世界を写し取ろうとしたもので、作者漱石自身の意外なまでの浪漫派的資質を、余すところなく露呈するものとなっているのは、何とも興味深いことだと思います。

とはいっても、やはり見逃してならないのは、この作品集の掉尾（最後に）付された「趣味の遺伝」と題する一篇で、当時、実際にロシアとの間で行なわれた日露戦争で戦死した、「浩さん」という登場人物に仮託して、近代日本が行なった戦争を、手厳しく

批判的に捉える真情をも決して隠してはいないという点です。

そのことは、東京（新橋駅頭）での日露戦争の凱旋パレードに遭遇しても、一向に万歳を唱えて歓迎するわけでもない語り手（「余」）の醒めた態度に認められるというだけでなく、また、国を挙げての戦勝ムードに対する、ほとんど冷淡ともいえる筆致からも、充分に窺^{うかが}い取ることのできるどころです。

このような意味で、『濠虚集』という作品集は、一見、同時代の現実問題とは無縁なように見えながら、実は、戦争で無^{むごん}惨な死を死ななければならなかった人たちへの、深い哀悼と鎮魂の一書として、漱石にとっての、まぎれもなく「戦中・戦後文学」であったことを告げているものと思われます。

文明批評家としての夏目漱石と「日本近代文学」の高峰—壮年期の代表的作品群

そのように、夏目漱石は、誰にも受け入れやすいユーモア小説を書いて人気を博した一方で、また、決して時流に阿^{おもね}ることのない、すぐれて「戦闘的な」作家でもありました。

もっとも分かりやすい例を挙げるとすれば、たとえば、『二百十日』（明治39年10月）という作品で、阿蘇山という（九州にある）活火山の噴火とフランス革命とを重ね合わせて「文明の革命」（文明を革命すること）の必要性を説いていますし、また、『野分』（明治40年1月）と題する小説では、作者自身の分身ともいべき白井道也^{どうや}という名前の文学者を登場させて、自らの熱い情熱が吹き込まれた「維新の志士の如き」慷慨家に、文明批評の大演説を繰り広げさせているほどです。

そうした漱石一流の戦闘性は、プロの小説家に転じてからも、ますます強まりこそすれ、決して衰えるようなことはありませんでした。

大学を辞めたばかりで張り切りすぎたせいも、文体がいささか厚化粧になっている『虞美人草』（明治40年）という長編小説と、みずみずしい青春小説の代表作ともいえる『三四郎』（明治41年）とをはさんで、明治42年（1909年）に執筆された『それから』という作品は、漱石の数多くの小説に登場してくる様々な主題が絶妙に絡み合い、次第に熱を帯びて切迫してゆくという、前期三部作（『三四郎』『それから』『門』）を代表する傑作となっています。

ここで、『それから』について、少し言及してみたいと思います。

この作品の主人公、代助は、大学を卒業してからもう何年にもなる30歳の青年として設定されていますが、まだ一度として就職したことのない「高等遊民」をもって自ら任じています。彼は、「細^{さいち}緻な思索力と、鋭敏な感応性」（細かい思索力と鋭い感受性）の持ち主であるにもかかわらず、「麵^{パン}麩の為に働らく事」（つまり、食べるために働くこと）

を潔^{いさぎよ}しとせず、時代が悪い、日本と西洋との関係が悪いから働かないのだ、と嘯^{うそぶ}いている（主張している）ような始末です。

とはいえ、このような主張の背後には、単に代助の私的な我儘^{わがまま}というだけにとどまらず、実は、漱石自身の年来の課題ともいえる「日本の近代」との対決が目論まれており、新たな文明によってもたらされた風潮への不満や反発を、徹底的に考え抜いていこうとする、格闘する作家漱石の熱い意図が、深く込められていたのだと見ることができます。

こうして、『それから』という作品では、文明開化に対する東西（日本と西欧）の対照、「道義」という倫理観をめぐっての新旧世代の対立が、あらためて、真正面の主題に引き据えられて検討されます。そして、このテーマは、代助と平岡という友人、そしてその妻三千代との三角関係をめぐって、遂には破局に至る深刻なドラマとして、極限のところまで掘り下げられていくことになるのです。

おそらく、皆さんも同じでしょうが、時には、不安や悩みに囚われて、どうにもならなくなるということがあると思います。そうした時、重大問題を回避したり、安易にやり過ごしたりして済ませるのではなく、しっかりと正面から取り組んでみようとするのが、優れた文学の特徴とでもいうべきものです。漱石文学がまさにその一例で、後に後期三部作（『彼岸過迄』『行人』『こころ』）と呼ばれることになる作品群のなかでも、この問題は、さらに一段と深められたかたちで展開されていきます。

ところで、多くの人たち、特に、若者たちが不安と焦燥感に駆られるというのは、いわば過渡期というか、転換期に特有の現象ともいうべきものですが、当時の文明「開化」、すなわち、西欧の社会に習おうとした「近代化」と密接に関係したトピックとして、「自由と独立^{おの}と己れ」（『こころ』）とに充ち満ちた時代にこそ生まれ合わせた人間たち通有の、「個我意識」というものが挙げられます。

そのような、ともすれば「利己主義」にも堕しかねない、「自由と独立心」に溢れた個人意識の実態を鋭く抉^{えぐ}り出すとともに、近代人の心の奥底を徹底的に掘り下げようと図った点で、漱石文学は、日本近代文学の稀有な高峰ともいうべき達成を示しているといえるのではないかと思います。端的に言うなら、漱石の小説作品は、まさに近代日本文学の発展過程それ自体の具体化に他ならず、仮に、自意識のドラマを描き尽すことが近代文学の本質をなすものだとするなら、とりわけ、漱石による二つの三部作は、その一つの頂点の姿を示しているには違いありません。

とはいっても、その際、同時に見落としてならないのは、そうした追求の行き着く果てに見えて来たもの、それこそは、実は、自意識の無間地獄^{むげん}ともいうべきもので、いわば行き止まりの袋小路でしかなかったのではないかという観点でしょう。

たとえば、『門』（明治43年）という作品の主人公、宗助は、禪（仏教）に救い（安心立命）を求めて得られませんし、また、『こころ』（大正3年）の「先生」は、「明治の精

神」に殉じるのだとっては、詰まるところ自殺することを余儀なくされます。作者の漱石自身も、これらの作品を執筆する途上で、たぶん、極端なストレスのためなのでしょうが、持病の胃潰瘍を悪化させたばかりか、漢詩や書画（書道や絵画）の世界に、息抜きの一と時を求めないではいられませんでした。

おそらく、そうした事情の表われだと言っていると思いますが、『行人』（大正2年）という作品の主人公で、大学の先生でもある一郎は、何か得体の知れないものに急き立てられるかのように、狂気すれすれのところにまで追い詰められていきます。その結果、取り上げられることになるのが、興味深いことに、中国は唐時代の禪僧・香巖きやうげんの逸話なのです。

唐の禪僧・香巖という名前は、一あるいは、皆さんの中にも、これまでに聞いたことのある人たちがいるかも知れませんが—あまりにも「聡明靈利そうめいに生れ付いた」がゆえに「多知多解が煩わづらいをなし」、禪師のもとでは、ついに達観することの叶わなかった僧侶（お坊さん）のことですが、彼は、「一切を放下ほうげし尽くし」（つまり、すべてを投げ出して）「竹藪たけやぶに中あたって戛然かつぜんと鳴る石の「朗かな響きを聞いて」ようやくのことで悟りを開き、「そうして一撃に所知うしなを亡う」悟達（悟り）の境地に至ったのだといわれます。

ここには、自らと向かい合う他人や自然を対象化して我が物にしようとするのではなく、相手に自己をあずけ、むしろ自分を捨てさることによってこそ主客合一の究極境に達するのだという、「絶対即相対になる」ことの要諦ようていが示されているといえるのではないかと思います。

そこにはまた、わが身を捨て、自他合一をはたすことが、実は、かえって自己という存在を充実させ、生かすこと的前提要件になるのだという、いわば近代知を克服するために踏むべき、もうひとつの方向が示唆されているのだと言い換えることもできるでしょう。

こうした事情をも勘案（併せて考慮）するならば、最晩年の漱石には、日本においてもすでに完成の極に達しつつあった「近代文学」の行き詰まりを見極め、その隘路あいろ（行き止まりの袋小路）を何とかして打開していきたいとする熱望が、密かに募っていたとしても、何ら不思議なことではなかったと言えるかも知れません。

「修善寺の大患」と「現代文学」への転進—『道草』『明暗』ともう一つの「文学論」の構想

ところで、夏目漱石が亡くなったのは、ちょうど50歳になる直前のことでしたから、最晩年とはいっても、今から顧みれば、かなり若い晩年ということになります。また、彼が、本格的な創作活動に取り組むようになってからでも、わずかに10数年ほどを数えるだけという、ごく限られた期間に過ぎませんでした。

ところが、この間の文学活動は非常に目覚しく密度の濃いもので、とくに、近代化がもたらす光と影を、極限にまで問い詰めようとした中期と後期の代表的作品群は、日本の「近代化」にまつわる諸問題を一身に担って生き抜いた、すぐれて「戦闘的な」文学者に相応しいものであったとすることができます。

そうした追求意欲の強靱さは、ほとんど死の直前に至るまで、いささかの遲疑停滞をも垣間見せなかった点に、これをよく窺い知ることができるものと思われまます。

とはいえ、一般に「修善寺の大患」（明治43年）と呼ばれる大きな病気に見舞われた経験を綴った、エッセイ集『思い出す事など』（明治43年）や『硝子戸の中』（大正4年）と並行して、その後に書かれた最晩年の作品をも、単に「近代文学」の発展・大成という文脈でのみ捉えて済ませるには、あまりにも新しい、独自のスタイルを予感させるものが秘められているように感じられます。

じじつ、留学から帰ったばかりの漱石自身—それは、取りも直さず、処女作の『吾輩は猫である』を執筆していた時期に重なるわけですが—その当時の自分自身をモデルにした『道草』（大正4年）という自伝風の小説や、さらには、結局、未完成に終わった『明暗』（大正5年）という遺作にも見られる顕著な特徴、すなわち、統整的な結論の提示を断念し、その読み取り方をもっぱら読者に委ねるといふ叙述法や構成を見れば、これらの作品は、むしろ狭い意味での「近代文学」を乗り越えようとする、文字通り「現代文学」への転進の一例として捉えることができるのではないかと思います。

あらためて思い起こせば、夏目漱石の没年である大正5年という年は、西暦年号でいえば、1916年に当たります。したがって、漱石は、すでに第一次世界大戦の報道にも接していたわけですし、後に西欧の「モダニズム」(die Moderne)と総称されることになる、まったく新しい1910年代の文学(芸術)運動とも、いわば同時代の空気を呼吸していた現役の作家でもあったわけです。

しかも、これらの文学(芸術)運動が、いずれも「近代の超克(克服)」を標榜していた事実をも念頭に置いて考えてみれば、最後期の漱石文学を、このような「現代文学」への転進の模索という文脈に位置づけてみることも、あながち見当外れのことではないと言えるでしょう。

じっさい、後に、漱石の娘婿になる門弟のひとりであった松岡譲によると、晩年の漱石は、「近来しきりにもう一度講壇(大学の教壇)に立って、新に自分の本当の文学論を講じて見たい気がする」(『漱石先生』)と述懐した(述べた)と伝えられており、現在刊行されている漱石の『文学論』とは明らかに異なる、未踏の境地に達しようとしていたことが推測されます。

では、最晩年の夏目漱石が抱いていたと思われる、もう一つの文学論(新・文学論)の構想とは、いったい、どういうものであったのでしょうか。その中身を予感させる詳し

いスケッチは、残念ながら一切、残されてはいませんが、そのように、いわば「現代文学」としての夏目漱石の作品世界を追求し、その内実を解明してみようとするのが、今後とも、なおまだ充分な解決を見ていない、興味深い研究課題として浮上してくるかも知れません。

「皮相上滑りの開化」への疑念と「自己本位」ということの重要性

以上、夏目漱石とその文学の特徴について、初心者への手引きになればというつもりで、いくつかのポイントを選んでお話をしてきました。これだけでもすでに明らかになったことと思いますが、漱石文学の全容は、たったひとりで実現したものとしては、ほとんど信じられないほど幅の広い、まことに多彩を極めるものでした。

それは、そもそも文学とは何か、という根本問題の考察から始まって、日本の「近代文学」の頂点を極めるとともに、やがて、その克服をも模索して、ついには「現代文学」へ転進してゆくという、実にダイナミックなものでもありました。

ところが、先ほども少し触れましたように、そのような漱石が、本気になって文筆活動に費やした期間は、わずか10数年に過ぎなかったことを思えば、その創作活動が、ほとんど他には類例をみない、いかに密度の濃いものであったかが分かるというものです。

とはいっても、実のところ、いろいろな角度から様々な読み取り方が可能であるという点に、むしろ文学作品に顕著な特性のひとつが見出せるのですから、限られた時間内で詳しい説明を尽くすことは、残念ながらできません。したがって、作品の細部への立ち入った読解は、今後の皆さんの努力にお任せすることにして、最後に、もう一度、今日の時代の動向にどう向き合えばいいのかという、もっともアクチュアルな問題に立ち返って考えてみることにしたいと思います。

外発的な「近代化」に直面し、漱石が、これを「皮相上滑りの開化」として批判的に捉えていたことについては、先ほど少しお話した通りです。1868年の明治維新に至るまで、日本は長らく鎖国を続け、世界の国々から孤立していましたから、国際社会に向かって国を開いた途端、大混乱に見舞われたとしても、無理のないところだったかも知れません。

それにしても、そのような過渡期の混乱に、人々はいったいどう対処したらいいのでしょうか。

漱石自身は、「自己本位」をつかんで始めて、自信を持てるようになったと、数ある彼の講演のなかでも、もっとも有名なもののひとつ、「私の個人主義」（大正4年）の中で語っています。とはいえ、やはり注意しておかなければならないのは、彼のいう「自己本位」とは、他でもなく、自己の個性の核心に突き当たるということであって、何でも

「自分勝手」なことをしてもいいという意味では決してないという点です。

したがって、漱石の唱える「個人主義」は、「我儘な自由」を主張するような「利己主義」(エゴイズム)と同じものではありません。漱石は、自由には義務も伴う、と言っていますし、自分の自由を主張したいなら、同じように、他人の自由をも認めなければならない、すなわち、「他の存在を尊重すると同時に自分の存在を尊重するというのが私の解釈」だと、述べているところです。

おなじことは、国際間の、つまり国と国との付き合い方にも、また、そっくりそのまま当てはまるのではないかと考えられます。

近代日本は、残念なことに、「富国強兵」をスローガンに、「^{ゆうしせんせい}有司専制」と呼ばれる官僚制を強化し、軍備をも増強し続けて、ついには、本来ありうべき「道義」や「徳義心」を放擲し(放り投げ)、倫理性をもかなぐり捨てて顧みないという、「弱肉強食」の世相を生み出していきました。それがまた、対外的には、西欧先進国の帝国主義に倣って、植民地主義的なナショナリズムを鼓吹することに繋がり、日本の近代史に大きな汚点を残す結果となってしまったのです。

このような、たとえ時代の最先端をゆくものではあったかも知れませんが、本質的には強圧的で野蛮な「国家主義」の動向が、結局のところ、尊い人命を数多く損なうことになったばかりか、復旧のために必要とされるさまざまな意味での社会的コストを、かえって莫大なものにしてしまったのだという事実にも、もっと真剣で、注意深い^{まなざし}眼差しを向ける必要があるのではないかと思います。

「世界同時性」の現状とその課題—^{こんにち}百年後の今日、夏目漱石から学ぶべきこと

ところで、私は、専門家ではないので、中国のことを、あまりよく解っているわけではありませんが、もし仮に、鄧小平時代に始まる「改革・開放」(1978年)が、日本の「明治維新」になぞらえることができるものだとするならば、皆さんは、ちょうど夏目漱石がその代表作を書いていた頃の明治の若者たちと、ほぼ同じ年齢層に当たると言えるのではないのでしょうか。

そのように考えてみれば、百年以上も前の夏目漱石の作品が、少しは親しみやすい姿かたちで立ち現われてくるかも知れないですね。

たまたま先日来、中国・四川省での大地震(5月12日)や、ミャンマーでのサイクロンによる不幸な大規模災害が世界中を驚かせました。また、中国でのオリンピック(2008年)や万国博開催(2010年)の期日も間近に迫っているわけですが、そうしたことのすべては、実は、衛星放送やインターネットなどの普及によって、いわば「世界同時性」の^{ただなか}只中にあると言っても過言ではありません。つまり、国内問題は、今や、否も応もなく、ただちに「国際問題」でもあるわけです。

また、今後に予想される、深刻な大気汚染やオゾン層の破壊といった、地球規模の環境問題への対応を考えたとき、今こそ急務として求められるのは、むしろ国際間の友好的かつ協力的なネットワーク作りであって、決して、国境を堅くすることではないと思います。

したがって、たとえ「富国強兵」をスローガンに、様々な意味での国家規模を拡張することがとりあえずの国是であるにしても、まずもって考えるべきは、民生（国民生活）の安定ということであり、国同士が角突^つき合わせて、いがみ合うことなどではない筈です。

何事であるにせよ、即刻「世界同時性」が問題となる現代は、もはや、19世紀から20世紀にかけて見られたような、偏狭で排他的なナショナリズムと結び付く「国家主義」の時代ではないと見なければなりません。

そのようなことをも含めて、日本は、中国にとって、まだ、今後とも、いろいろな意味でのモデルたりうるのではないかと思います。そして、せっかくそういうモデルが身近にあるわけですから、学ぶべきところは学び、そうでないところはなるべく「反面教師」（悪いことのモデル）として模倣^つしないで克服すること、それこそが、真に「歴史に学ぶ」ということの意味なのではないかと思います。

漱石もまた、外圧に振り回されるのではない、真に内発的な開化の可能性を模索して、単に人の言うことを受け売りしているのではない、「自己本位」を掴むことこそ大切なことなのだと説きました。それはまた、皆さんが、あなた方自身の研究を進めていく上での心構えにも通じることなのではないでしょうか。

そのためにも、まずは、自分の原点をしっかりと見据えて大局観を磨くこと、そして、何事であれ、深く読み抜くという作業を粘り強く続行すること、この二つが、いつの場合にも欠かすことのできない、必須の前提条件になるのだらうと思います。本日のお話が、そうした折りの、何かの参考になるとすれば幸いです。

付記

2008年5月25日（日）、第一回「安徽省日本文化祭」の開催に当たり、中国・安徽大学（合肥）の招きに応じ、日本の近代文学に関する記念講演を行なった。後援の一に名を連ねた上海駐在の日本国総領事館の話によると、このような、省を挙げての文化フェスティバルは珍しく、しかも、その準備のほとんどが、中国人スタッフの手で行なわれたのはきわめて異例だとのこと、担当者の労苦と尽力のほどが偲ばれる、予想以上に規模の大きな催しであった。

聴衆の中心をなしたのは、安徽省全体で7校を数えるという、日本語学科を擁する大学や学院の学生諸君と日本語・日本文化の研究教育に携わる教員諸氏とであったが、当日の会場では、演者からのたつての所望で、二人の通訳者が付き、厄介で煩雑な逐語訳の労をとってくれた。おかげで、大方の理解が行き届いたものになったのかどうか、中国語に不明な筆者には定かでないとはいえ、翻訳するという作業を通して、難しいけれどいい勉強になったとの反応をもらえたことが、せめてものなぐさめであったというべきかも知れない。内容は、もとより学術講演といったレベルの大それたものではないが、いくつかアクチュアルな話題にも言及しているので、あえて記録にとどめるという意味で、ここに講演録を掲載させていただくことをお断りする次第である。

また、今回の旅は、思いがけない貴重な出会いにも恵まれて、筆者にとって優れて有意義な機会となったことを、併せて特に付記したい。